

武蔵野日曜集会

サタンとの戦

――エペソ書第6章10～24節――

1992年3月8日（武蔵野）

小池辰雄

神さまの言だけ 主にありて キリストの真道を帯とし 信光の盾 御霊と聖言 平安と愛
キリストは神に在りて 我々はキリストに在りて

【エペソ6】

10 終に言わん、汝ら主に在りて其の^{いきおい}大能の勢威に頼りて強かれ。11 悪魔の^{てだて}術に向かい立ち得んために、神の^{よろ}武具をもて鎧うべし。12 我らは^{ところ}血肉と戦うにあらず、^{まつりごと}政治・権威、この世の^{くらき}暗黒を^{つかさ}掌どるもの、^{あだ}天の処にある悪の^と霊と戦うなり。13 この故に神の^と武具を執れ、汝ら^{あだ}悪しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。14 汝ら立つに誠を帯として腰に結び、義を^は胸当として胸に当て、15 平安の福音の^は備えを靴として足に穿け。16 この他なお^{たて}信仰の盾を執れ、之をもて^と悪しき者の凡ての^と火矢を消すことを得ん。17 また^{すくい}救の^{かぶと}冑および^{つるぎ}御霊の^と剣、すなわち神の言を執れ。18 常にさまざまの^{はばか}祈と願とをなし、御霊によりて祈り、また目を覚して凡ての^{はばか}聖徒のためにも願いて^う倦まざれ。19 又わが口を開くとき、言を賜わり、^{はばか}憚らずして福音の奥義を示し、20 語るべき所を^{はばか}憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。

21 愛する兄弟、主に在りて忠実なる^{えきしや}役者テキコ、我が^{ありさま}情況わが^な為す所のことを、^{つた}具に汝らに知らせん。22 われ彼を^{つた}遣すは、我が事を汝らに知らせて、汝らの心を慰めしめん為なり。

23 願わくは父なる神および主イエス・キリストより賜う平安と、信仰に伴える愛と、兄弟たちに在らんことを。24 願わくは^{みめぐみ}朽ちぬ愛をもて我らの主イエス・キリストを愛する凡ての者に^{みめぐみ}御恵あらんことを。

●神さまの言だけ

マタイ伝4章の、

「ここにイエス^{みたま}御霊によりて荒野に導かれ給う、……3 試むる者きたりて言う『なんじ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと^な為らしめよ』4 答え



て言い給う『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る』と録されたり』(マタイ4:1～4)

これは申命記の8章3節に出ている言葉です。言葉通りにいうと、やはり、「パンのみによるにあらず」

というヘブライ語なんですけれども、モーセ自身は、本当に神により頼んで、パンのことを思わない。ところが、本当により頼んだモーセには、天から「マナ」が降ってきた。あのマナは神の業ですから、同じ食料であっても違うんです。モーセ自身は本当に神により頼んで、食料のことを荒野において考えない。ところが、マナが降ってきた。岩から水が湧いてきた。これはみな神さまの業です。内容は同じでも、次元は違う。

だから、キリストがこれを

「こう書いてあった」

というのは、あそこでは、キリストは旧約の申命記8章3節の通り言われたんだけど、イエスのお気持はもちろん、

「パンだけだと思っていたら大間違いだ。神さまの言だけなんだ」

と、ひっくり返してしまった。

「神さまは自由に創造して食物を送ってください」

と。ところが

「パンだけではない、神の言葉も必要なんだ」

ということでは本当の信仰の世界ではない。

●主にありて

今日は、エペソ書の最後のところで、サタンとの戦いですが、これはまた、パウロらしい言い方をしている。

10 終に言わん、汝ら主に在りて其の大能の勢威に頼りて強かれ。

この、

「主にありて」(エン・クリオー)

は非常に大事な言葉で、

「キリストの中に居て」(エン・クリスト)

と同じです。「主によって」ではない。「主の中に」いなければダメなんです。サタンとの戦いで一番大事なのは実は、

「汝ら主にありて」

の、この「主にありて」だけで、もうそれで解決してしまう。それをいろいろ語っている。

「主にあると、大能の勢威がやってくる」

と。主になれば、やってこない。これは絶対に「主によりて」と訳したらダメです。



「強かれ」

とパウロは言っているけれども、

「強くなるぞ」

です。パウロが「強かれ」なんて言うものだから、

「さあ大変だな」

と思うけれども、ちよつとも「さあ大変だな」ではない。

Ⅱ 悪魔の術^{てだて}に向かい立ち得^よんために、神の武具をもて鎧^{よろ}うべし。

「神の武具」というのを、分析しているいろいろ言っているわけです。これは、サタンに舐^なめられては大変だから。サタンを愛するわけにはいかない。

¹²我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威、この世の暗黒^{くらき}を掌^{つかさ}どるもの、天の処^{ところ}にある悪の霊と戦うなり

他の人たちや、あるいは自分自身と戦うよりも、もうひとつ、それを操っているところの元と戦う。操っている奴がサタンなんだ。ちようど、『ファウスト』でメフィストに操られていたように。ゲートという人は、人間の中には神的なものとサタンのものとあつて――『ファウスト』はもちろん物語から来て、ゲートはそれを一つの方法にして言っているんですけれども――その戦いだ、という。

「政治・権威」も実は、政治家も、現実ではまことに情けない政治である。また、本当に教育者が権威を持たない。しかしまた、とんでもない権威がある。それはみなサタンに操られて為されている政治であり、権威であるから、問題は、現実の政治家や教育者よりも、その奥の、

「何によつて教育者が操られているか、政治家が操られているか」

そのことです。そのことが、そういう「空中の霊」、もろもろの霊。パウロが

「その霊を弁^{わきま}えよ」

と言ったのはそのことですが、それとの戦いなんだ。

● キリストの真道を帯とし

今度は、我々がそういったサタンと戦えるか、という問題になりますけれども。

「天の処にある悪の霊と戦うなり」

と、この「天」というのは本当の天界ではない。地上と本当の天界との中間の、霊的なところ。神さまのいる天ではない。パウロが

「第三の天」

と言った、あの天ではない。空中をさま迷っているところの、そして、人間を操っているところの、その悪の霊と戦う。正直、このことをみんな知らないですね、本当に。

「ルチファー」、優れた天使が墮落して、そしてサタンになる。サタンの子分もいろいろいる。



そういう諸々の霊、「悪の霊」は複数で書いてある。「悪の」というのはサタンのこと。ギリシヤ語では、「悪」という抽象名詞と、それから「サタン」と両方使いますけれども。

¹³この故に神の武具を執^とれ、汝ら悪しき日に遭^あいて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。

人間の生涯には、いろいろな状況がありますから、調子のいい時もあるし、また暗い時もあるし、その状況によってどうのこうのと動いてはダメだ。

¹⁴汝ら立つに誠を帯として腰に結び、義を胸当として胸に当て、

「誠」とは、人間の心がただ「まこと」だという、そういう誠ではない。「真理」「アレーテイア」という字で、

「恩恵と真理をもて」

という言い方があるでしょ。あの「まこと」は、人間の「真心」という誠と違う。神さまのくださっているところの真理の力、それが「まこと」なんです。

「我は真理なり」

とキリストが言われたでしょ。あの「真理」です。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

という、あの「真理」です。

「真理」という言葉はちよつと観念的に響くけれども、そうじゃない。キリストの真理というのは、非常に具体的な力をもっている。この「まこと」はキリストの「アレーテイア」なんです。困ったね、この訳が。「誠」というと、ちよつと我々の心の誠と思ってしまう。何と言ったらいかな。「真実」でもない。

藤井先生がよく「真実」と言われたけれども。

「ウソはダメだ、まことであれ。信仰よりも真実が大事だ」

なんて言われたけれども。あれも、ちよつと藤井先生の、いわゆる「観念信仰」に対するアンチな気持ちで言われたんですけれども、それでも実は足りない。

キリストの持っていた、現しておられた、具体的に持つておられた、力ある真理です。「力ある真理」なんだ。あるいは、「生命ある真理」だ。「真理」という言葉だと、何だか道理のことになってしまう。やっぱり、「道」なんだ。本当は、「天道」だ。老子の言うような、あの「道」の世界です。

「天道を帯としろ」

と、むしろ、これの方が「アレーテイア」「まこと」の気持ちを現していると思います。「天道」あるいは「真道」でもいい。「力道」でもある。言葉というものは困るんだ。大体、気持ちがお分りになったら、それでいいです。

「汝ら、キリストの真道を、まことの道を帯とし腰に結び」

「帯とし腰に結び」でしょ、だから、自分が持つていてのではないんだ、これは。いただいた、



そういった真道を帯とする。「帯とし腰に結び」という言い方がおもしろい。バンドをしつかり締めろと。

●信光の盾

「正義」も困る、これも「義」なんです。

「義を胸当とし」

です。「正義」というと、ちよつと次元が質的に、いわゆる「正義」になってしまふから。「デイカイオス」という字です。キリストの義だ。パウロが戦つたのは、この「キリストの義」ですから。ロマ書1章のところにある、

「義は福音のうちにあらわれた」

と言つた、あの義です。

15 平和の福音の備^{そなえ}を靴として足にはけ。

「平和」ではなく、「平安」だ。福音は平安ですから。平安から平和が来るので、いきなり平和でない。神さまとの交わりの世界がちゃんと来ているのが、「平安」です。福音はその「平安」なんですから、「平和」ではない。福音は戦う。安易に「平和」なんて言えない。神・キリストとの交わりの、ちゃんとしたものの、それが「平安の福音」です。

「平安の福音の備を靴として足にはけ」

とは、表現の仕方がなかなか面白い。

16 この他なお信仰の盾^{たて}を執^とれ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。

「信仰」は、私は「信交」、あるいは「信行」と書きます。仰いでいたつてダメだから。信交は盾だから、守るんだ。この盾も光っていなければダメ、磨いてないと。神の光がくると、その盾が光って、相手は目が眩むんです。凄いです、この盾というのは。「しんこう」の「こ」の字は、光でもいいね、「信光」。これは「信光の盾」だ。

「悪しき者」と、定冠詞でいう時には、サタンのことになる。「ボネロス」という字が使つてある。「サタン」とは「ディアボロス」という字ですけども、人を分裂させてしまふ者です。

「悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん」

と、パウロはいろんな戦いの事を知っているものだから、そういう表現をした。なにも、パウロは実際、武器を執つたのではありません。イスラム教のマホメットとは違う。ただ、サタンとの戦いに、普通の戦争の道具を、全くこれは例えをもつて言っているだけのほなしだ。

●御霊と聖言

17 また救^{すくい}の冑^{かみち}および御霊の剣^{つるぎ}、すなわち神の言を執れ。



これはいい、「かぶとが救いだ」ということは。なかなかパウロは詩人でもある。御霊と神の言が一つになっているのが大事なことです。聖書の言葉は聖霊によっている言葉だから。御霊と聖言は離すわけにいかない。神さまの言には御霊の力がある。だから、キリストが何かものを言うとき、その力が作用して、ラザロが甦ったりする。これは、聖言が直ちに聖霊の力をもっているから。だから、

「御霊の剣、神さまの言」

という。よく、剣ということをするものだから、パウロの絵を書くと、パウロは剣を持っているね、レンブラントなんか。あれは御霊の剣を象徴しているだけで、パウロが何も剣を持っているわけじゃない。

¹⁸常にさまざまな祈と願とをなし、御霊によりて祈り、また目を覚して凡ての聖徒のためにも願いて倦まざれ。

聖霊の祈りをしろと。「御霊によりて」ではない、「御霊に在りて」だ。「エン・プネウマティ」と書いてある。これは、

「御霊にありて祈り」

です。聖霊の祈りというのは、手段に思っただけはいかん。

¹⁹又わが口を開くとき、言を賜わり、^{はばか}憚らずして福音の奥義を示し、

聖言をたまわる。私もしょっちゅう、話しながら、言を賜っているわけだ。「憚らずして」とは、胸を開いて、大きな開いた心で、隠しだてのない、ということ。ドイツ語でいうと「フライミューテッヒ」という言葉です、「開けつばなした気持でもって」ということ、「オープンハート」です。

「福音の奥義」とは良かったね。福音は「ミステリオン」だから。福音のミステリー、神秘。「神秘」というのはいい言葉だ。

無教会では、「神秘」という言葉は嫌いだ。だから、無教会は全く聖霊以前の世界なんだ。塚本先生もその点では手前だった。藤井先生も手前。時々、それらしい次元には来ていらつしやっただけでも、本当にそこに入っていない。もうしょうがないね、この聖霊の体験というものは。

●平安と愛

²⁰語るべき所を憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。

パウロは全くそれをやったわけだ。憚らずに言うものだから、鎖に繋がれてしまった。ステパノもそうだ。

「汝らは聖霊に逆らう」

なんて言ったものだから、ステパノは殺されてしまった。キリストは、その最たるひとです。



群衆はたくさん、キリストに助けられながら、終いには、反旗をひるがえしてしまうんだから。民衆というものは、ただ御利益ごりやくとして受けとっている。御利益ではないんだ。

²¹愛する兄弟、主に在りて忠実なる役者えきしやテキコ、我が情況ありさまわが為す所のことを、具つふさに汝らに知らせん。

テキコがこの書翰を持って行くわけです。

²²われ彼を遣すは、我が事を汝らに知らせて、汝らの心を慰めしめん為なり。

²³願わくは父なる神および主イエス・キリストより賜う平安と、信仰に伴える愛と、兄弟たちに在らんことを。

当然、信交は愛の内容をもっている。信交とは、キリストの愛に愛をもつて応えることが信交なんだ。

「分らないけれども信じておこう」

ではない。「分らない」どころじゃない。キリストに愛されたんだから、我々は。十字架の贖罪で愛されている。

「もう心配いらんぞ、聖霊をさあ受けとれ」

といって、聖霊をいただいたから、そこが正に平安なんだ。キリストからいただいた平安。信交は当然、愛です。

²⁴願わくは朽ちぬ愛をもて我らの主イエス・キリストを愛する凡ての者に御恵みめぐみあらんことを。

「朽ちぬ愛をもて」とはいいね。「朽ちぬ」「アフタルシア」という字だ。

●キリストは神に在りて

それで、パウロさんの言うとおりなんですが、さっき、

「汝ら、主に在りて」

が大事だと言ったでしょ。キリストはサタンとの戦いで、何で戦ったんですか。パウロみたいにこんなたくさんいろんな武具を執ったですか。キリストは武具を何も執らない。ただ、

「神さまに在った」

だけです。キリストは神さまの中に自分を入れてしまっている。

マタイ伝4章の、

「ここにイエス御霊によりて荒野に導かれ給う、悪魔に試みられんと為るなり。²四十日、四十夜、断食をして、後に飢えたもう。³試むる者きたりて言う『なんじ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと為らしめよ』⁴答えて言い給う『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言ことばに由る』と録されたり』(マタイ4:1-4)

断食したのだから、お腹がすいている。



「それだったら、石をパンにしろ」
と。

「パンだけを思っていたら、どうにもならん。神の口より出づる凡ての言を思え。
私はそれで断食したんだ」

と、キリストは神さまの言を喰^{くら}っていた。神さまの言を喰い、かつ神さまの言を飲んでいた。
それだから、断食ができた。私はいつか、断食する時に皆に、

「あなた方、ただ我慢して断食するんじゃない。キリストを食べるんだ、キリスト
を飲むんだ。そういう気持で断食しろ」

と言った。我慢の断食ではない。積極的に、神さま、キリストを食べる。

だから、民主主義でも同じことです。神無き民主主義はダメだ。神の下における民主主義。
むしろ、民は我々は皆、神の僕なんだ。その時に本当の民主主義ができるんで、日本の民主主義なんてものは全然ダメだ。日本がいろんな事で世界に問題にされるのは、結局そう
なんです。

何といつても、向こうはキリスト教の伝統を持っていますから、自分たちは自覚しなくとも、考えの奥に違う次元を持っている。そのキリスト、神を否定するような共産主義はとうとうひっくり返ってしまった。ゴルバチョフはよくやった。ソ連がひっくり返ってよ
かった。

「⁵ここに悪魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上に立たせて言う⁶『なんじ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんじの為に御使たちに命じ給わん。彼ら手にて汝を支え、その足を石にうち当つること勿^{なか}らしめん』と録^さされたるなり』⁷イエス言いたもう『主なる汝の神を試むべからず』と、
また録されたり』(マタイ4:5-7)

サタンは詩篇の言を引用して、

「必ず助けてくれる、だから詩篇のようにやってみろ」

と。イエスは、

「み言をそのように使うことは大間違いだ。汝の神を試むべからず。ただ従え。神
さまの力を試みようと思つて、そんな御利益的な魔術的なことを思つてはダメだ」
と。

●我々はキリストに在りて

「⁸悪魔またイエスを最高^{いと}き山につれゆき、世のもろもろの国と、その栄華と
を示して言う、⁹『なんじ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんじに与えん』
¹⁰ここにイエス言ひ給う『サタンよ、退け「主なる汝の神を拜し、ただ之に
のみ事^{つか}え奉^{まつ}るべし』と録されたるなり』¹¹ここに悪魔は離れ去り、視よ、御



使たち来り事^{つか}えぬ。」（マタイ4:8～11）

キリストは何をもつてサタンと戦ったかというと、

「神に在って、神の力で、神の言で」

戦っているんです。

「神に在って」

の戦いである。キリストは自分が霊的だから、この霊的な力でサタンと戦うかというところじゃない。どこまでも、キリストは自分をゼロにしている。神が百%にキリストの中に入ってきているから、サタンは参つてしまう。だから、キリストは何も武具は要らない。神さまだけが武具なんだ。神さまだけが、神の言、力が。その中に自分を入れている。

「神さまに私はただ従っている。それだけの話だ。サタンよ、退け！」

と。このキリストの在り方が即ち、

「神に在りて」

なんです。我々は、

「キリストに在りて」

です。そうすれば、パウロがこんなにゴタゴタ言っているけれども、最初の一言でいいと言ったのは、そのことなんです。

「キリストに在りなさい。本当にキリストの中に入っていないさい」

と。乳飲み子がお母さんの胸に抱かれていれば、それでもう万事はよくいつているわけだ。それと同じことだ。

パウロのいろいろな戦いも、実は、パウロが一番先に言った、

「主に在りて」

という、その「主に在りて」ならば、これらのいろんな武具は全部本当のものになる。主になくて、これを

「自分の信仰だ、自分の何とかだ」

なんて思ったら大間違いです。いいですね。実に、簡単なんです、問題は。この

「キリストに在る」

ということが本当の聖霊の世界です。

「御霊に在る」

ということは「キリストに在る」ということと同じことです。これはもう、十字架で贖われているんだから、畏^{おそ}れなく、憚^{はば}りなく、キリストの中に入ればいい。

「主さまー」

と言つて、投げ入れればいい。祈りの世界で、投げ入れの、あるは、ぶっ倒れの、その境地が本当につかめると、すぐ力が来る。まわりのゴタゴタを考える必要がない。

御霊をいただいてから、私は病^{やまい}にとつつかれないものね、正直。とつつかれるからその



信仰がどうだと、そんなことを言っているのではない。人間はいろいろ弱いですから、いろんな事がありますけれども。

そういうわけで、パウロの言葉も楽しく読める。だから、パウロは終りに非常に愛のことを言っている。

「朽ちざるところの愛をもって」と。

賀川豊彦がキリストの愛にとつ捕まったら――卒業の間に軍隊教練があつた――銃を執つたところが、その銃を捨ててしまった、

「人殺しの銃なんか私は嫌だ」

「お前は国賊だ」

と言われて、教官に蹴倒されて鼻血をだしたりした。あの青年賀川豊彦は本当の勇者だった。戦争否定だから。武器を否定した。パウロがいろんな武器のことを言つたが、賀川豊彦は無手勝流だ。

「ひとつも武器は要らん。キリストの愛だけだ」

と。一生貫いたですね、あの人は。私は素晴らしい人だと思う。新島襄の教育の精神もそうです。今の同志社がどんなことになっているか知らんけれども。

我々は、この福音をいただいたからには、本当にその次元でいよいよ行きたいと思っております。終わります。

